

## 【筑波大学附属駒場中学 国語】

～本年度の筑駒国語の解答指針～

□ 説明文 榎木 野衣『子供の絵』による

筆者は「子供はみな絵の天才だとか、子供にはかなわない」という話は「ご勘弁」と思っていたが、自分に子供が生まれてからは「子供の絵は、子供の絵としてではなく、美術として本当にいい」と考えるようになった。子供の絵はなぜいいのか。大人が子供のように描こうとしても、絶対に同じように描けない。それは、子供の手が小さく、筆圧も小さいという身体的特性のために、大人には計り知れない細部をもつ絵になっているからだ。筆者は美術批評家の立場から説明する。

問一 —— (1) の「以前は私も『この手の話はご勘弁』と思っていた」について

(A) 「ご勘弁」という気持ちの意味を説明する記述設問。

「この手の話」とは、子供の絵には幼い子供の無垢な感性が表れていると考え、「子供はみな絵の天才だとか、子供にはかなわない」といって子供の絵をほめる人の話を指し、「ご勘弁」だというのは、筆者が子供の絵をほめそやす意見に賛同できず、不快に感じていたことを表している。

(B) 筆者が子供の絵をほめそやす意見に対して「ご勘弁」と思っていた理由を説明する記述設問。

しょせん子供の絵だという先入観があり、子供の絵を正面から見てこなかった筆者にとって、「この手の話」は、大人や親のひいき目の入った、客観的な根拠にとぼしい賞賛にすぎないと思われた。そのため、美術批評家として「この手の話」に同調する気持ちになれなかったのだ。

問二 —— (2) 「単純きわまりない線だけの絵です」、—— (3) 「こうした複雑きわまりない丸や線の集積からできています」について、前者はどのような点で「単純」で、後者はどのような点で「複雑」なのかを比較して説明する記述設問。

「前者は～という点で単純であり、後者は～という点で複雑である。」という形でまとめるのがわかりやすく、無難である。

前者はスーッとひかれた一本の線だけで描かれているという点で単純であり、後者は子供の手が小さく、筆圧が均質でないため、微妙に線の濃さや折れ具合が変化して、大人ではまねのできない細部を持つという点で複雑なのである。

問三 ——（４）「子供が小学校に入って最初にならう『こくご』や『さんすう』の影響なのです」という部分で、「こくご」や「さんすう」がひらがなで書かれている理由を説明する記述設問。

義務教育を経るにしたがって子供の絵の魅力がどんどんなくなっていくのは、国語や算数という各教科特有の学習内容のせいではなく、国語でも算数でも、まだ文字や計算の意味を理解していない小学生に、均質なマス目の中におさまるように文字や数字を書く練習をさせる初等教育の指導法に原因があることを読者に印象づけるため、それ自体固有の意味を持たないひらがなで科目名を表記したのだと考えられる。

問四 ——（５）子供の絵に描かれた線や形がそれぞれ「別の権利をもって動き始め」とは、どうなることをいうのか説明する記述設問。

マス目の中に収められた文字や数字がみな同じ大きさ、同じ価値で整然と並んでいるのに対して、子供が絵に描いた線や形の一つ一つは子供が絵を自由に描けば描くほど他の線や形とは異なる個性を主張して、大人では描けない繊細さやのびのびとしたスピード感、躍動感を絵に与え、ダイナミックに絵を形作っていくのである。

問五 ——（６）「私はそれがどこかでちょっと残念なのです」と筆者が思う理由を説明する記述設問。

自分の子供が文字をきちんとマス目に収められるように成長するのは喜ばしいことではあるが、一方で、文字をマス目からはみ出さないように書く練習をすることで、子供から繊細で躍動感のある絵を描く能力が失われしまうため、少し残念な気持ちにもなるというのである。

## ㊦ 漢字の書き取り問題

一つのことわざ全体を漢字とひらがなで書き記す、筑駒独特の形式。大きな文字で、楷書で、ていねいに書くこと。

### 「足るを知る者は富む。」

（満足することを知っている者は、たとえ生活が貧しくとも心は豊かで、幸福であるという意味。『老子』の「足るを知る者は富み、強めて行う者は志有り」に基づく。）

## ㊧ 詩と随筆 石垣りん『シジミ』、『ユーモアの鎖国』による

私が夜中に目を覚ましたら、ゆうべ買って水につけておいたシジミたちが口をあけて生きていた。夜が明けたら、私はそれらをすっかり食べてしまうだろう。その私も口をあけて寝るばかりの夜である。詩（Ⅰ）とその自作の詩にまつわる作者の随筆（Ⅱ）を読み合わせて詩の解釈を深める新形式の出題。

問一 ムダ死にとは、シジミがどうなることをいうのか簡潔に説明する記述設問。

シジミを長く生かしてあげたいと思って、二日、三日たつ間にシジミたちは口を開けて死んでいった。ある日、私はやっぱりムダ死にさせてはいけなと決め、シジミをなべにいれるときに、「私といっしょに、もう少し遠くまで行きましょう」と語りかける。以上から、「ムダ死に」とは、シジミが、人間に食べられてその命の糧になることもなく、ただ器の中で死んで捨てられてしまうことだと解釈できる。

問二 Iの——(1)「夜が明けたら／ドレモコレモ／ミンナクッテヤル」について、

(A) 「ドレモコレモ／ミンナクッテヤル」がカタカナで書かれている理由を説明する記述設問。

「夜が明けたら／ドレモコレモ／ミンナクッテヤル」に続いて「鬼ババの笑いを／私は笑った」とあることから、私が鬼ババになったつもりで、おどけて言ったセリフであることを表すためにカタカナで書かれているのだと考えられる。

(B) IIの文章(随筆)を踏まえて、——(1)に込められた気持ちを説明する記述設問。

問一について述べたように、IIの文章で作者は、やっぱりムダ死にさせてはいけなと決め、シジミをなべにいれるときに、「私といっしょに、もう少し遠くまで行きましょう」と語りかける。以上を前提に考えると、シジミをムダ死にさせるのではなく、シジミを食べて自分の命の糧になってもらい、シジミの命とともにもうしばらく生きていこうと決意していると解釈できる。

(C) ——(1)に込められた気持ちについて、IIの文章がなかったものとして、Bの解答と異なる解釈を考える説明記述設問。

夜中に目を覚ました私は、台所で味噌汁の具材に買ったシジミたちが口を開けて生きているのを見た。シジミは人に食われて死ぬためではなく、シジミなりのかけがえのない生を全うするために、一生懸命に生きているのであり、私は生き物の命を食らわなければ、自分の命を支えられない鬼ババのような存在なのだ。その事実気づいた私は、他の命を奪うしか生きるすべのない宿命に悲しみと罪深さを感じ、もはやふだんの平穏な心でシジミを食べることはできない。鬼ババになったつもりで、「ミンナクッテヤル」とおどけて言ってみなければ食べることができないのだ。

問三 IIの——(ア)「口をあけて生きていた」と——(イ)「口をあけて死んでゆきました」の二つの「口をあけて」の違いを「(ア)は……だが、(イ)は……である。」という一文で説明する記述設問。

(ア)は生きるために殻を開けているのであり、(イ)は死んで殻を閉じられなくなっているのである。つまり、(ア)は体内に酸素や栄養分を取りこむために、殻をうっすらと開けているのだが、(イ)はすでに貝が死んで殻を閉じる力が失われ、殻が大きく開いてしまっているのである。

問四 Iの——(2)「うっすら口をあけて／寝るよりほかに私の夜はなかった」の意味を説明する記述設問。

「口をあけて寝る」ほかない私はシジミと同様の存在といえよう。どのような意味で同じなのか。「私の夜」は私のどのような状況を表しているのか。

シジミが私に食べられて死ぬのを口をあけて待つほかないという理不尽な運命にあるのと同様に、シジミの命を奪って生きる私も世間や社会という大きな力には抗えず、つらい日々の暮らしに耐えながら、いつか訪れる死を静かに待つほかないという理不尽な運命にあるのだ。

～合格のために～

- ことわざは漢字かなまじりで書けるように日ごろから書き取り練習をして覚えよう。
- 文章中に明示されている心情・要点を網羅すれば得点できる問題は8割以上は正答できるようにしておこう。
- 文章中に明示されている内容に基礎をおいた合理的推論が必要となる問題は7割以上正答できるようにしておこう。
- 特に高度な着想力を要求する問題については5割前後の部分点を確保できるようにしておこう。

※以上のことを、日ごろのテキスト学習から心がけてみてください。満点を取る必要はありません。7割確保できれば、合格できます。

※本校の国語では、高度な読解内容を、簡潔にして要を得た表現で論述することが求められます。書くべき事柄に気づいても、いざ書くとするとコンパクトにまとめ上げることが難しいのです。

担当の先生から直接アドバイスを受けられる環境で、合格答案になるまで粘り強く書き直し作業を繰り返してください。丁寧な記述問題演習・過去問演習を積み重ねて、本校の出題傾向に順応していきましょう。